小島烏水全集

第一巻

小島烏水全集

第一卷

大修館書店

小島烏水全集　第一卷　（第七回配本）

定價八八〇〇圓

昭和五十六年二月十五日印刷
昭和五十六年二月二十五日發行

著　者　小島烏水

發行者　鈴木敏夫

印刷者　青木　勇

發行所　株式會社　大修館書店

東京都千代田區神田錦町三―二四
電話〇三（二九四）二二二一（代表）
〒一〇一振替（東京）九―四〇五〇四

第一巻　目次

扇頭小景

序　三
再版序　四
烏水を憶ふ　瀧澤秋曉　五
多摩川を溯る記　七
丹波山を踰ゆる記　一四
昇仙峽　一八
鞭骨記　三五
富士川を下る記　四一
伊豆めぐり　四七
函谷の冬夜　五一
刈萱日記　五八

殘芳記　七六
神武寺の秋夕　八三
妙義山の秋（錄一節）　八九
湘南臥雲錄　九六
古人の詩歌紀行に見えたる大磯驛　一〇三
幽寂　一一三
南船北馬（錄十六首）　一一六

木蘭舟

序　一二三
《流水の卷》
足柄山　一二七
乞丐兒　一三一
今昔の新聞記者　一四六

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

放火犯の少女　一五九
薩摩琵琶　一七〇
太田道灌の墓を訪ふ　一七六
《落花の巻》
蚊やり火物語　一八一
女郎花　一八九
秋の聲　一九四
すみれ帖　一九八
蛇のぬけ殻　二〇三
菜種のこぼれ　二〇九

銀河

自題　二二三
冬の富士　二三九

富士の姿繪　二三四
箱根火山彙の外輪を匝る記　二四四
法師蟬　二五九
丹波山　二六六
懺悔　二七一
小壺日記　二七九
日本人の風流と植物保護　二九六
繪畫と色彩　三〇六
花　三一二
湖論　三一八
『日本名勝記』を讀みて麗水の紀行文を評す　三二八
飛驒客信　三四二

初期文章

雨夜友ヲ懷フノ記　三四九
西郷翁ノ逸事　三五一
少年の義務　三五三
畫探し　三五五
國ヲ富マス一奇策　三五六
近世豪傑物語　三六三
商業叢談　三八一
畫家小話 ほか　三八四
狂心會出品　三八七
英佛百年戰爭記　三八八
足利將軍三代木像の梟首　三九〇
鎌倉江島紀行　三九二
今言見立 當世一口評　三九七
商品考　三九八
道中雜記　四〇三

赤間關の大海戰　四〇九
時事一束　四一五
菊池武政奉明帝書　四一七
俠將軍　四二一
鬼王團三郎曾我へ歸りし事　四三七
大奇窟を探る　四四〇
學海依田百川先生へ呈上　四四九
俳句の流行　四五一
大塔宮事蹟考　四五四
　大塔宮稱呼考　四五八
新井白石先生の墓に詣づ　四五九
在五中將　四六二
しなさだめ太夫へまゐらす　四七〇
再び月旦太夫へまゐらす　四七三
吉田の渡海　四七四

「學燈」記事　四七七
大和男子啼泣するなかれ　四七七
僞少年を驅る檄　四七九
敢て地方有爲少年に告ぐ　四八三
終刊の辭　四八五
明治二十六年を迎ふ　四八六
東海道五十三驛　四八七
學燈或問　四九二
新玉の歳を迎ふ　四九四
横濱と學藝雜誌　四九四
名所古跡　四九六
解題・解説　近藤信行　五〇一

小島烏水全集　第一卷

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

扇頭小景

序

宿帳に駄句を書くいたづらが嵩みて、旅に日記は、茶碗に箸より離れがたなくなりぬ。さるほどに、畑打つ農夫と語り、浦曲に網引する漁叟と語り、羅宇のすげ替する翁いたはしく、馬場に小草苅る牛飼童子愛らしくなるにつけ、今まで人の世を僞はりと觀じ、骸骨に破笠して、ひたすら山水に放浪せしは、ひとむかしとなりにけり。大に迷ふ煩惱なくんば寧ろ怒らざるに如かず、大に悟る法器にあらずんば漫に泣くことを休めよ。もとの杢阿彌、我から大俗に墮したるけふこの頃、惡因緣は逐へども去らず、詩に渴すること日に酷だし、血を咯きて詩未だ成らず、空しく筆の軸を嚙み碎きて庭の紅梅を睨みつめたる夕、栩々然として蝴蝶となり、鎌倉、大磯、箱根、足柄、翅の輕きに任せて遊ばんかな破るゝまで。はかなき空想の、上塗り禿げたる古机より、引き出し一杯の反古日記をえりぬきて、こんなものが出來たり。

明治三十二年四月

烏水

再版序

かず〳〵の旅日記をえりぬきて、紀行文にものしたるを、いはゞ篋笥に藏して、自ら怡まば足りぬべきを、さすがに末は反古となさむも口をしく、かつは同好の士に頒ちまゐらせたくて、かくは册子に纏めけるなり。今まで、草鞋の痕を印したるは、東海の一隅に過ぎねば、人訪はぬ遐陬僻邑の露柳煙篁に、あこがるゝよすがもなく、さなきだに拙き水莖のあと、珍らかなる海味の魚と、山餐の熊掌とを、併せ有せざるこそ、恨めしけれ。

明治三十二年初夏

戸太村舍に於て

烏　水　しるす

烏水を憶ふ

秋風通ふ關の戸に
いばゆる駒は古の
武藏野わたり露白く
笛吹颯すさびては
寒かるらめや旅衣

信濃路近き山々の
朝な朝なに霜あらば
煙りは深き金洞の
峰のもみぢ葉などてにか
から紅ゐに染まざらむ

鎌倉山に跡ふりし
つはものどもの夢路をば
ものゝ夫ならば弓杖の
筆もて辿るまめ人に
まみえざらむや立田姫

秋　曉

硯が窟文人の
暫しの筆を待ちつけて
さながら寫す岩々の
それにも靈の聲ありて
仰げば高し石の門

叩きて聽きねこゝに又
嘗てはめぐる峰々の
奇しく壯きく恠しきに
折るゝ我慢のまが角の
短きかひな斷たまくと
愧ぢつ恨みつ悶えけん
なにがし男なかりしかと

（去年十月、妙義に遊ぶとき、贈らる）

多摩川を溯る記

みすゞかるてふ信濃路の友を訪ひて、木曾より飛驒に入らむか、多摩川を溯りて、なまよみの甲斐路に入らむかと、友なる人に咨りしに、木曾は寒きこと、今も臘月のごとくなれば、吹雪髭をなぐつて皓きは鶴こそよけれ、吾物ながら傘の上の重たき荷物、それも梅の葩ならぬはうれしからす、多摩川のほとり、桃は未だし、梅はさかりを過ぎたれど、藍より青き雪代水、弓の如くなる崖に沿ひて流るゝあたり、練絹の茵より柔き嫩草を踏み、羽弱き蝶を追ひて、そゞろありくもいと興あり。殊に富士川に名だゝる俵岩、屏風岩など、つれなき人は利に敏く、庭の敷石欲しければにや、今ごろ剷して缺きつゝありと聞く。今行かずして後にむかしを追想せむは、紈扇を擧げて西山に沒せむとする日を招くよりおろかなるべしといふ。

さらば多摩川こそ善けれと、三月十六日、品川より新宿行の列車に乘かへ、立川にて青梅線にうつる。客車の狹く、小さく、低く、且つ汚れたる、はや田舍に入たる心地す。動搖劇しく、軋る音殊に喧すしければ、車中鮓を詰めたるごとく、膝を交へて語らふ人も、聞く人もいと惱むめり。

横濱を出立するときより、降りしきる雪、風に蒲の穗と狂ひしが、國分寺あたりより、綿をちぎつて拋つ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com